

その日は、冬とは思えないほど柔らかな日差しが町を包んでいた。
ドアベルが鳴る。

扉を開けると、そこには、見慣れた顔の男性が立っていた。

「ただいま、って言っているのかな」

ツバメは気まずそうにしていたけれど、少し、晴れやかな顔つきだとも思った。

「もちろんよ。おかえりなさい」

私は扉を開けて、彼の帰宅を歓迎する。
ふたりで話す場所は、いつもキッチンだ。
それが当たり前になっていて、私たちは廊下を歩きはじめた。
その間、ツバメはぽつりぽつりと話していく。

「薬、飲ませたよ。母は寝たきりだったのが嘘^{うそ}みたいに、今、元気
にしてる」

「そう、よかったわ」

「改めて、あの薬のすごさを知ったよ。それで、両親には薬のことを
内緒にしてほしいって頼み込んだんだ。それが俺にできる……ル
ルへの償いだと思ったから」

「正直に言えば、ありがたいわ。本当はちょっと……結構、心配し
ていたの」

「そうだよ。そもそも、あの薬を使うときに秘密にしてと言われて
いたし……それを、守りたかったんだ」

そんな話をしていると目的地にたどり着いたので、椅子に座る。
入口で立ったままのツバメに、座るように促した。
まるで客人のような振る舞いに、思わず笑いがこぼれた。

「な、なに？」

「いいえ。数日いない間にお客さまになっちゃったなと思っただけよ」

「それは、だって……。戻ってきちゃったけど、本当に、ごめんね」

「あら。私は何回許すって言えばいいのかしら」

そう返せば、ツバメは眉をさげた。

「ルル、ありがとう。俺のことを許してくれて、薬を渡してくれて」

「……^{くすし}薬師として、選んだだけのことよ」

「そっか。それはとっても……君らしいね」

私たちの間に、沈黙が流れる。

それは決して重たいものではなかった。

私は小さく息を吸い込んでから、口を開く。

「ツバメ。今日からまた、はじめましょう」

「え……？」

「お互いにもう隠すことはなにもない。だから、まっさらな状態で、今から」

立ちあがり、ツバメの^{そば}へ行った。

「私はルル。薬屋リーファの薬師よ」

少しだけ震える手に、どうか気づかないで。

同じように立ちあがったツバメは、まっすぐに私を見つめる。

「……俺は庭師のツバメだよ。今日からここで精一杯働くから、よろしくね」

日が差し込むキッチンの片隅で、私たちは互いの手を、強く握り合った。



春の陽気の中、俺は次の家へと足を進める。

配達もこの一件で終わりだ。

これが終わったらルルと一緒に昼食をとって、少し休んだら薬草園の仕事をして――。

ルルと一から築きあげた毎日は、穏やかに過ぎていく。

「リーファのツバメです。薬を届けに来ました」

最後の家に挨拶をして、家へ向かう。

すっかり見慣れてしまったクレールの町は今、花々で彩られている。

「ただいま」

「おかえりなさい」

ちょうど会計を終えた患者とすれ違う。

その背を見届けると、ルルはうんと伸びをした。

「お疲れさま」

「ツバメもお疲れさま。診察が思ったよりも早く終わったの」

「そうだったんだ。でも午後もいっぱいでしょ？」

「ええ。だから今日のお昼は手軽にサンドイッチでいいかしら」

「もちろん」

俺から受け取った薬籠^{くすりかご}を抱え、ルルはほほえんだ。

「そうだわ、庭師さんをお願いがあるの」

「为什么呢」

「待合室にプランターを置きたいのだけど、作ってもらえるかしら」

「喜んで！　どんな感じがいい？」

「患者さんが見えて心安らぐものがいいわ」

「そうだなあ……。あ、じゃあさ、一緒に苗を見に行かない？」

「え？」

「花、一緒に選ぼうよ」

「私に、できるかしら」

不安そうなルルに、俺は言った。

「大丈夫。どんな花でも、俺がきれいに植えるから」

「……あら。頼もしいわね」

ふたりで顔を見合わせて、笑った。

ゆっくりと、たしかに。

ルルとの日々が、静かに芽吹いていく――。

エンディング A 【ともに花を咲かせて】